

平成30年度第30期川崎市青少年問題協議会
第2回協議題・調査専門委員会会議録

○日 時 平成30年11月27日(火) 10時00分～12時00分

○場 所 第3庁舎 13階 こども未来局会議室

○出席者

(1) 委員 7名

協議題・調査専門委員：芳川委員長、香山副委員長、藤田委員、大草委員、
高村委員、新井委員、前川委員

オブザーバー：岡田会長

(2) 傍聴者

なし

(3) 事務局

佐川室長、箱島担当課長、北村担当係長、菊池職員

○配布資料

- 資料1 第1回協議題・調査専門委員会における意見まとめ
資料2 第30期川崎市青少年問題協議会協議テーマ調査票
資料3 協議テーマ調査票一覧及び事務局提供資料
資料4-1 地方公共団体の青少年育成行政の概要
資料4-2 他都市青少年問題協議会の協議テーマ
資料5 第30期川崎市青少年問題協議会 協議スケジュール
参考資料 第1回協議題・調査専門委員会会議録

1 開会

- ・配布資料確認
- ・会議公開についての説明

2 議事

(1) 第30期川崎市青少年問題協議会協議題について

芳川委員長：前回の会議後に協議題について調査票を配布し、事前に提出していただいたので、まずそれぞれの委員から調査票に基づいて説明をしていただいてから、協議したいと思います。

新井委員：今は、1日の生活時間のうち、SNS等に関わらずに生きていける時間が少ない時代ですから、我々もこういう先端技術と青少年とのかかわりをどういうふうに持っていくかということについて、一度焦点を当てて考えておくべきかなと考えました。

前川委員：私は、3枚の調査票を出しました。1つ目は、新井委員がおっしゃっていた

だいているとおりでですので省かせていただきます。

2つ目は、学校・家庭・地域の再考ということで、やはり今、青少年の居場所がないというのが私の印象でして、この間、中学校の先生にもお話を伺いましたが、中学生も放課後の居場所がない、というようなことをおっしゃっていました。学校・家庭・地域というのは、ずっと言われていますが、どこまで実現しているのか、よりよい状況になっているのかというのは非常に評価がしづらい部分があり、やはりもう一度考えなくちゃいけないと思っています。というのは、学校では、ブラック部活、先生方の多忙な状態が見られますし、家庭では、共働き世代が非常に増えていて、地域では、私は子ども会に所属していますが、子ども会会員の減少が続いている。地域教育会議もどこまで機能しているのかというのは非常に難しい。地域教育会議のコーディネーターも必要だといわれていますが、コーディネートをする人がいないといった、人材不足というのは各地域・団体、それぞれにあるのではないかと。そういう状況の中で、青少年の居場所をめぐってこの三者がどういった形で連携・提携できるのか、再考する良いきっかけだと思います。

3つ目は、さらに具体的な話ということで、こども文化センターの評価について、数値で評価できる部分とできない部分があるのではないかと、といったような疑問を感じましたので、青少年の居場所としてのこども文化センターの機能や、そしてそれを評価する上で、青少年の居場所としてのこども文化センターのあり方を再び考える必要があるのではないかと感じました。以上です。

大草委員：やはり青少年問題というのは、どんどん高度化社会が進んで、いわゆる自然生活の喪失という問題が大きく関係している。特に1970年代くらいから、過充足の社会に変化している。今、青少年問題がいろいろ語られる中でまだ古い社会の子ども問題を取り扱われていたり、さらに、過充足の社会に変更してからの児童問題や青少年問題というのが語られたり、ごちゃごちゃになっているような気がします。

今私が懸念しているのは、この過充足の社会になってからの子どもの問題も大きく変わっている。例えば、不登校というのは、以前は、行きたいという気持ちがすごく強いけれども行けないという、非常に苦しい状況の不登校の子が多くいましたが、今の子どもは、基本は行きたくないから行かない。基本的に行きたくないというのが前提としてあって、そして周りからせつつかれることでいろいろ苦しんでいる。そんな問題に変わっています。

私が興味・関心があるのは、最初の立ち上げの頃に関わった神奈川県金太郎キャンプ、これは自然との交流だけじゃなくて、自然の中で生きていく中での人間交流など、そういう自然体験をこのキャンプで体験してもらうことが、ひいては不登校の改善につながるんじゃないかという目的でスタートしたのですが、こういう自然体験の中で生き抜いていく力です。

「ビジョンクエスト」については、これはアメリカの罪を犯した青少年を

幌馬車に乗せ、昔の人たちがフロンティアに向かった同じ状況設定にして、子どもたちにそれを体験させ、その中で起こるいろいろないきさきを、トレーナーが収めながら、西へ向かうというプログラムです。生き抜く力というのをつけながら犯罪防止をする。高度化社会で人間が生の状態生きていくということを知らない子どもたちが、それを獲得することはまさに現実を生き抜いていく力になるだろうと。こういうことが僕の一番基本にあります。

実際に実施するとなると、安全面やスタッフ確保など難しいが、それに酷似する、その一環としては、こども文化センターでも、中でどういう自然体験ができるのかと、そんなことも考えながら関わっていけるかなと、これが1つ私の大きなテーマですね。

そして、今度はその真反対の仮想社会です。もし、仮想現実というのを取り上げるとすると、徹底した仮想社会というものを感じさせないリアリティー社会を構成してその中でいろいろ体験するというような、具体はまだないですが、そのような理念はあります。この2つのテーマで何か良いアイデアがないかなということを今考えています。

高村委員：先ほど、部活の話もありましたが、来年度から、部活動に対してガイドラインが出たので、平日や土日に、部活動をしない時間があります。じゃ、その時間は家庭以外にどこに行くのだろうか。例えば、中高生が特にそうですが、公園にいても、例えばボールは使えない、小さい子からみると居るだけで怖い、そういうイメージを持たれてしまい、居場所がない。こ文に行って卓球をやっている小さい子がいれば邪魔者扱いだし、結局行くところがないかなと思いました。今年から始まった10月9日の「かわさき家庭と地域の日」には、ボウリング場や映画館に中学生がどっと押し寄せたという話がありましたのでやはり行き先が限られてくる。居ても煙たがられないであまり気にされない、そういうような場所を探して行くだろうなと思います。

ツールとして、もうスマホがありSNSがありますから、こういう所おもしろそうだよとなれば、どんどん集まっていくと思うので、あえて逆に生徒から意見を聞いて、こういう場所があったら行ってみたいという話が出れば、中高生が行けるような場所というのがあってもいいと思っています。

あとは、本校の生徒なんか見ていると、ボランティアは嫌い、ということではなくて、ボランティアを募集すると結構やるんですよ。ですから、ボランティアが地域で必要だということがあれば、本校の生徒は積極的に参加すると思います。防災について言えば、私も今、学校で防災の会議をやっておりますが、隣の麻生高校の校長先生も入っていただいています。結局、地域で昼間にもし震災があったとすると戦力になるのは中高生、という話もありましたので、そういう部分を少し考えても良いと思いました。

香山副委員長：他の委員さんの意見を聞いていると、時期尚早、まだ無理だよという感じもしなくはないし、かなり難しいハードルだという気はしますが、行政区単位

では川崎市内でも動き出しているところがあることを知っていますし、地域や学校間では数校が集まってやるということもあるので、できればそういう方向で動き出して、生徒のボランティア意識の高さも合わせて、少しでも前に進めていけたら、そんな気もあり書かせていただきました。

ただ、その下の課題にあるように、1部署、1つの局や区単位ではなかなか動けない。そして各世代に関する、医療、警察、消防、いろいろなどところとの調整をしていかないと実際には現実化しない。なかなか個人的に夢を描いているような簡単にはいかないかもしれないですが、青少年問題協議会がスタート地点になるとまたすてきなのかなと思っています。

藤田委員：居場所、SNS、防災、いろいろありますが、やはり中高生世代の子どもたちをどう社会と結びつけるかというのがテーマになっているというのは共通している気がしました。今までもずっとそういうことをテーマにしてこの協議会をやってきたと思いますが、それが具体的なところに結びつかないという思いが僕にはあって、今の香山委員のお話をお聞きしながら、何か1つテーマがあったほうがそこに向かってどう社会参加できるかということで、漠然としたいろいろな形での社会参加ではなく、テーマを決めて、どう子どもたちを社会参加させていくのか、そのような防災がチャンネルになって社会参加を進めていけるといった、そういうテーマがあるといいのかなという気がすごくなりました。子どもたちの社会参加みたいなことで、学校やこ文も関係させながら、そんなことができたらすごくいいと思いました。

それぞれのこ文単位ぐらいのところ子どもたちが集まってどんなことができるのかを、もちろん大人の支援をもとに子どもたちが考えていく。そういった時には、よくありがちな、そういったところで集まれというと自主的に集まる子の出番だけではなく、そういったところからこぼれがちな子も拾いながら、そういうテーマだったら集まってくる子もいるかもしれない。

私自身も実は大学で教員の研修を担当したことがあり、そこで防災のことも、いろいろ調べたことがありました。そうすると様々な地域で、子どもたちが中心になってその防災をどうしていこうかというような取り組み、特に中学校の取り組みってすごくたくさん実践例がありました。ですので、そういったことも参考にしながらやっていくのもどうかなという気がしました。

もう1つは、やはり漠然と中高生ということだけでなく、どういう子どもたち、どういう心配の子どもたちに私たちは目を向けたいかという、何か対象とする子ども像を明確化した方が、テーマを決めていくときに修練しやすいかなという気がしましたので、そのあたりについてまた議論が進みましたら立ち戻って考えられたら、とは感じます。

芳川委員長：皆様のお話を聞かせていただいて、まず、実は大学は地域防災のことを結構意識の中にあります。そういう意味では藤田委員と同じように、周辺の地域防災をテーマとして取り上げて、グループを組んだりしましたので、各自治

体、あるいはその単位の中で、中学生、高校生、大学生のボランティアの取り組みは何か所かあるということを知っています。ただ、それぞれの地域に限られているという感じは確かにあります。川崎市内の様子はどうか、どうなったらいいのか、それを検討する可能性があるかどうかというところは1つのテーマだと思います。

それから、どういう中高生か、これは委員の皆さんと今後考えていく必要があると思います。どちらかというところでは、特定の子どもというよりも、一般的な中高生世代を対象に考えてきた気がします。今回もそれでいいのかどうか、対象を踏まえた上でテーマを考えていくということもあると思っています。そういう意味では、青少年問題協議会ではありますが、青少年と考えるか、青少年問題と捉えるのかによって、展開が違いますので、これもぜひ委員の皆様の意見を聞きながら考えていきたいと思っています。

では、討議に入る前に、事務局から資料の紹介をお願いします。

・事務局より、資料3、資料4-1、4-2を説明

芳川委員長：ここからは、今までの調査票の内容や、あるいはそれぞれの発言に基づいて協議題選定に向かっていきたいと思っています。今日は、後ろにホワイトボードを用意しましたので、発言された意見が見えるような形で整理しながらまとめていきます。次回の会議で協議題が具体的に選定できればいいと思いますので、本日はぜひ積極的に発言してください。

新井委員：居場所については、多分大事な問題かとは思いますが、こ文は前期でも取り上げました。要するに、何で中高生はこ文に行かないかというところ、設備がない。この前も言ったように、卓球をやれば邪魔者扱いされてしまい、防音装置がついているこ文も市内で3か所、そのほかいろいろ自由に大きな声が出せるところも川崎市内ではほとんどない。前期の時に視察にいった文京区や荒川区には、そういう施設があるので、中高生はそこに行く。施設をつくらずに、さあ、居場所をどうしようかといったって、果たしてそのとおりいいのか。だから、大事な問題だけれども、具申したら、やれるのか。それがあつて、お金もつけて人もつけてやらないとなかなか実効性が担保できないのかなという気がする。そこをもっと皆さんで議論していただいて、こうあるべきだという論で議論するのであればそういう方向もいいでしょうし、実際に実効性を担保できるようなものからやろうということであれば、そのテーマでいいのかなと。

芳川委員長：できるだけ実効性のあるものを、という新井委員の思い、とてもよくわかりますので、ぜひ、それを1つのキーワードとして念頭に置きたいなと思います。

前川委員：実効性というとは何か1つのテーマを据えて、ということで、先ほどから防災の話が出ていますが、私も子ども会議にいろいろ携わっていると、最近の子ども会議の今一番ホットなテーマが防災です。ただ、私は、実は子ども会議で防災の話をするのは大反対です。というのは、防災については、まず大人が決めないと、恐らく子どもの中から防災を話し合いたいという意見は出てこないと思います。それは私が10年やっていて子どもたちから防災をやりたいということは一言も出ていない。東日本大震災を経験したあの年だけ出てきました。と考えると、まず大人が思っているテーマであろうと思います。

もう1つは、子ども会議で取上げただけで終わってしまうだろうということです。防災について取り組むこと自体、私は反対しませんが、この川崎市青少年問題協議会として2年1期という長期間の中で防災の構築を大成したらそれで終わりではない。やはりできるだけ長い時間軸の中で取り組むテーマというような気がしています。

藤田委員：今の話、そのとおりだと思いますが、例えば学校の協力、総合的な学習の時間で地域防災に取り組むような学校に願います。その中で、地域にお年寄りがどれだけいるのか、自分たちにできるということを子ども自身で調べていくような、もちろんテーマは大人が与えるべきでしょうけれども。あとは高校生と中学生の連携となると、夕方にこ文に集まってきて、地域のことをその防災という切り口から考えていく。前回のテーマだった多世代交流が実はそこでも生じることになるかとも思いますから、いくつかモデル的な地域の協力を仰いでやっていただき、その後他の地域でもやっていくことで、子どもたちがこんなに変わりますよという姿を具申書の中で示せると、何か他の地域でも、やってみようという提案型のものとしてできるかなという気がします。

芳川委員長：事務局へ質問ですが、防災関連で、防災訓練や、情報発信、授業など、それは学校教育や地域が主にやっているのですか。青少年支援室はどの程度関係していますか。

事務局：防災関連について、タッチしている部分はないです。学校で実施している部分というのはあると思いますが、香山委員から御指摘いただいたように、いろいろな人たちが結びつきながら取り組まなければいけないテーマですので、学校だけというのは非常に難しい。今、広報や周知に関しては、危機管理室でもやっていますし、市政だよりでも特集を組んで行っています。ただ、行政だけでなく、いろいろな主体と一緒に取り組む時に、まずは仕組みづくりができていくのかということが課題だと思っています。

また、実効性について御指摘をいただいています。これは私どもも感じているところで、防災に限らず市の施策や事業につきましては、縦にやって抜本的に解決するというものが少ない。要は、事業を組み立てても、それを

担うスキームがないと本当の実効性が担保できないということで、今そういう課題が非常に多いです。

高村委員：防災という具体的なテーマであったとしても、青少年の参加を実現することが難しいのであれば、どんなテーマでも無理だと思います。防災は、どの人にとっても大切だし、明日災害が来るかもしれないという意味において切実だし、日中に地域に居るのは中学生ぐらいという現実がある中で、子どもたちが何か動き始めると他の人たちがそれについてきてくれるというのは、今まで学校教育に関わってきて、すごく感じることです。実は、地域を変える力も子どもが持っているんじゃないかという気もするので、ここで青少年の力みたいなものを信じて、何か1つ提案してもいい。もちろん、いろいろ問題があると思うので、できる範囲になってしまうのは仕方ないと思います。

新井委員：今回の資料にあった、ジュニアハイスクール消防隊は、僕も提案した1人ですが、結局ここだけで増えていない。中心となったのは、川崎市の消防団の団長までやった方で、この方が中心になって一生懸命動いても、近隣の2つぐらいの中学きりでなかなか増えていないのです。

それから、今、小学生を対象に、各消防署で少年消防クラブというのを組織しています。毎年、各消防署で30名程小学校高学年の子ども達を募集して、いろいろな防災施設に行ったり、体験をして、防災意識を高めようというものです。

地域の担い手と一緒に、といたしますけれども、今、その担い手をやる人がいない。子ども会でも、子どもは声をかければ集まってきますが、それを指導する、面倒を見る大人の人が今いない。だから、子ども会の会員もどんどん減少して、子どもが増えていても子ども会に入る人がいない。地域で協力してくれる人と一緒にやるといたしますけれども、それが難しいと思います。

大草委員：僕から言うと、防災って、特殊事情なんです。特殊事情は専門家たちがいるわけですよ。例えば消防署など。さらに言えば、助け合いという話がありましたが、昔は貧困だからお互いに助け合う5人組というのがあった。だけど、今はそんな5人組は要らないでしょう、と私は思うわけです。防災というのは大切なテーマであることを否定しませんが、これは基本的にこども未来局が扱う問題ではない気がしますし、もっと優先課題があるのではないかな。そういう特殊事情ではなくて、青少年世代全般にわたっての何か大きな課題というのがあって、それについて関わるというのが基本のあり方なんじゃないかなという気がします。

岡田会長：事務局に質問ですが、川崎がハロウィンのイベントでかなり成功したということですが、あのパレードはどう組織されているのか、市はどういう形で関わっているのか。つまり、今防災の話があったけれども、もう1つは祭りの

ようなものが参加のための仕掛けだと思います。

事務局：カワサキハロウィンのスタートは、チッタエンターテイメントという会社です。当初の規模はそれほど大きくないところからスタートさせて、商店街を含めてどんどん大きくなっていき、今はパレード当日の半年前から行政も入って会議をしています。行政は、商店街振興ということで経済労働局と、川崎区役所、警察が入っています。

高村委員：中学校では、人が集まってトラブルに巻き込まれやすいので、それについては気をつけなさいという話をしますが、行ってはいけないとも、積極的に行きなさいとも、両方とも言いません。ただ、メディアで取り上げられるので、特に仮装したりするのは、興味ある子たちは結構参加しているようです。去年までは富士見中学校にいたので、富士見公園一帯で行われる市民まつりでも、子どもたちは楽しんで参加しているという感じで、大きなトラブルに巻き込まれたという話はなかったようです。

新井委員：例えば、地方それぞれのところでやっている盆踊りや夏祭り、地域の中学校や小学校の先生はその祭りの時に巡回していますよね。

高村委員：はい。それから地域によってですが、なかなか盆踊りの踊り手が少ないから参加してくれないかと中学生を募集して、100人位で盆踊りに参加するところはあるかもしれませんが、それはその地域の特性で、それで中学生も積極的に参加しているという場合もありますよね。そういうお祭りには中学生もぜひ参加してくださいと、積極的に参加しているところが多く、私がいる地域でも、お祭りの時に生徒会の子たちがゲームコーナーのブースを作るなどしていますし、その辺は積極的に取り組んで、楽しんでいます。

藤田委員：お祭りについては、学校の校庭を開放して、子どもたちも出し物もしっかり出して、地域の高齢者のコーラスグループや踊りのグループ、地域の保育園の子どもたちのお遊戯など、いろいろな地域の資源というのを子どもたちが発掘して、総動員して、地域フェスティバルみたいなものをつくり上げるような試みをしている地域があります。ですので、子どもたちの地域参加、地域のいろいろな人たちと触れ合うきっかけとして、お祭りというのは良い手段だと思います。さらに、中高生世代や若者たちが主体的にそこに関わられるような仕組みや、地域の人たちとつながれるようなチャンネルをその中に入れ込むことができたらすごくおもしろいと思います。

香山副委員長：まず、この会議自体が、過去のことも含めてある程度イメージが具体的なものがあって、そういうものからすると、防災関係での青少年の社会貢献、そういう動きを支えていくというものはあまりふさわしくないというのであ

れば、そうだろうなと思っています。

先ほど私が提案した時に、今回調査票に書くのをやめようかと思ったのは、実はそこにあって、私個人が10年前からずっと言っている、やっていることなので、別にこの場でなくてもいいんです。けども、前期で多世代交流をテーマにしたので、そこからの具体的な1つの動きとして、青少年たちが前向きに社会参画の1つの具体例としてやれるのであればそれもアリかなという思いはあります。

この場合は青少年問題協議会だから、その切り口で言っていますが、一校長として、長年いろいろな地域でお願いしたり動いてもうまくいかなかった経験者として、やはりネックになっているのは学校ではないんです。学校での防災教育はもう進んでいるのでやりやすいし、子どもは動くし、なのですが、先ほどの資料にあったジュニアハイスクール消防隊も、高津区の子どもたちが表彰されているが、あそこには書かれているのは学校名ですよね。そうではなくて、私のイメージは、例えば自治会・町内会です。その子どもたちが、その一住民としての、青少年市民としての子どもたちが組織化されていて、地元のために、高齢者や年少者たちのために、いろいろな取り組みをしていく中で、大会でこういう技術を披露した、という形ならば、時間はかかるけれども、すんなり青少年市民としての力として今後期待できると思います。

片や、自治会・町内会も今高齢化で、下手すれば80代のおじいちゃんたちがやっていて、それにおんぶにだっこの状況になっているので、それは、他局が本当は取り組むべきことかもしれないけれど、本協議会が1つのメスを入れて、何かしらきっかけにならないかなと、そういう期待があります。なので、少なくとも2年で結論が出てどうのということはまず難しいと思いますが、公的な部分が動かないと、おそらく先ほど新井委員がおっしゃったように、やってはしぼみ、ということになってしまうのかなと。こういう協議会で協議されて、それで市長へ意見具申できるなら、夢が持てる、子どもたちのお役に立てる、これから大人になっていく青少年市民の子どもたちが、何か具体的な展望を持てるという、そういう意味においては議題として価値があるかなという思いで出しました。

ですから、防災に関するものでなくても、この協議会の中でふさわしいものが出てくれば、それでいいかとは思っています。今日結論を出さなくていいということでしたので、次回に向けて、私自身もまた少し考えていかなければいけないのかなと思っています。

最初に提案されたSNSやITについては、前回は意見が出ていましたけれども、皆さんどうなのか伺えればと思っております。

芳川委員長：資料にある、コミュニケーション、居場所づくり、社会参加、この3つのキーワードの中で、今日は主に青少年の社会参加が話題の中心になりました。ただ、藤田委員がおっしゃっていたように、何かがあると展開しやすい。そこで防災というキーワードが出てきました。

私は、防災について、とても興味・関心はありますが、実は、私の頭にあるのは若者のボランティアです。それから、先ほどハロウィンの話が出ましたが、川崎市は成功例というふうにメディアで取り上げているでしょう。そういう意味では、最短の社会参加だと思いますので、成功した理由は果たして何だろう、例えば青少年に何かの形で置きかえることはできないのか、それはすごく興味・関心があります。委員の皆さんの話を聞いて、ボランティア、防災、自然体験、多世代交流、全部をできるだけ含めた形で、どうやら今回は青少年の社会参加がキーワードということで、これから少し時間を置いて、第3回目でまた私たちの中で温まっていくような感じでいかがでしょうか。

そうすると、次回会議までに時間はあると思いますので、こんな資料が欲しい、場合によっては何かを見に行く、聞きに行くということも、少しやれたらいいかなという気がします。

事務局：資料5は、今後のスケジュールになってございます。例年だと3月に全体会を開く予定にして、そこに向かい第3回会議を1月頃予定しています。前期は、協議題は絞らずに方向性だけ決めて全体会に諮りました。ですので、ある程度大きなキーワードということで社会参加、もちろん居場所も多分、社会参加のところの場所に関係するので、そのぐらいの大きなもので考えたほうがよいという感じですか。

前川委員：次回の会議は、社会参加の主軸を何に置くかということですか。もう社会参加でいくのかというと、そこも何か少し不安感があります。

芳川委員長：前回、SNS、コミュニケーションの話をしましたが、今日話をしなかったのは、社会参加の中に含み込めるという感じが私個人はしました。

新井委員：次回もあるので、今回十分でなかった居場所づくりやコミュニケーションについて議論して、それでその3つの中からどういう形で皆さんの最大公約数をとるかというふうにした方がよいと思います。

芳川委員長：そのつもりでいます。大きい枠として社会参加がありますが、次回議論する中で、居場所づくりや、コミュニケーションだってメインとしてあるんじゃないかと思っています。今日のテーマとして、社会参加が結構話題に出ましたという感じですか。考えてみたら、前期もぎりぎりまで方向しか決めず、議論するうちに徐々に深まってきたような記憶があります。次回、もう少し方向性が見えて3月に耐えられるような形で議論したいと思いますので、御協力よろしく申し上げます。

大草委員：岡田会長は、お祭りの話をされていましたが、どういう意味でおっしゃって

いたんですか。

岡田会長：ハロウィンイベントの組織はどうやってつくられていて、どういう特徴があるのか。あのノウハウ、そこから活力を出したいと。もっと青少年を生かすのに市だけでなく、企業体を巻き込んで、という手もあるんじゃないかと思って話しました。

大草委員：村の祭りというのは、みんなで集まるという、祭りにする理由があって、そういうのが現代社会になくなってきているから、逆に、ハロウィンイベントのような形でやればみんながよく集まる。人間の化けたいという変身願望が充足するような、大っぴらにそれができるとい、そういうようなものを何かうまく商売人が利用してああいうものにしたということですよ。さっきの最初の形を聞いたら、ああやっぱりそうなのかなと思いました。

藤田委員：先ほど大草委員がおっしゃった、仮想現実の部分と現実の部分という話がありましたが、ハロウィンイベントというのは自分を変化させてそれをアピールするところが、今の世代にマッチしたのかなと思いますけれども。

芳川委員長：次回会議までに、事務局からまた調査票を回していただきましょう。もう少しキーワードを広げたい、あるいはこういうふうに思いついたという委員もいるかと思しますので、もう1回その部分を募集して、というふうな段取りにさせていただきますか。

事務局：今、委員長からお話があったように、大きな共通テーマの内容を今回お伺いしましたが、例えば狙いであるとかそういうところも書けるような、次回会議でテーマを集約できるように少し調査票を工夫してみます。

(2) その他

- ・なし。議事を終了。

3 閉会

- ・第3回協議題・調査専門委員会は、後日日程調整を行う。